

第三回宝井其角俳句大会「二十句詠」入賞入選作

●大賞「俳俳俳」

矢崎硯水（長野県諏訪市 八十一歳）

綿津見のさより身を以て感嘆符
吾に尾のあらば凭れて春逝かす
躁過ぎて鬱来にけらし世は臚
千の眼に視られ縮緬雑魚を干す
鈴懸の花よトカレフ購ひそびれ
ああ運否天賦卯の花腐しかな
あなたへの繭の中から糸でんわ
ラムネ呑んで微分積分解く気分
夏季講習ダリの柔らか時計見よ
井の中の蛙見つけぬ井戸浚へ
作麼生の梨の有りの実ありやなし
雲隠れしてじらすかよ星の恋
自然薯の尻尾を任じよっこらさ
残り蚊を矯めて鼻への大びんた
釣瓶落しの身は耐へがたし二日灸
勿体なや辻にふぐりを落しける
ゲゲバス角を曲がれば葱の剣
裏返し着る一刻がちゃんちゃんこ
俳諧師しをり利かせて米こぼせ
独楽澄めり地球の芯をさぐり当て

●準賞「故郷」

日野百草（東京都日野市 四十四歳）

国境緩き日本の冬田道
雪女母の顔してついでくる
誰よりも遠くへ行かぬ毛糸玉
白鳥に真つ白な死のありにけり
人間に少し疲れて山眠る
雪ですと女先生のたまひぬ
寒灯や神学校の受難曲
人生を半分休む布団敷く
行年の星従へる夜汽車かな
春風大事なことは言へぬまま
消しゴムの角あるままに卒業す
下萌やこれより反抗期に入る
初桜誰の日記も次は白
麦秋や負けて悔しい子が走る
水鉄砲打たれる前に抱きしめる
草むしり根の白色を惜しみけり
岩百合やまた若者が鳥をでる
旅先の水ありがたし瓜の花
ひとつ終へまた旅に出る半夏生
帰省する故郷違えど同じ道

●三席「冬日」

山原みさ子（千葉県印西市 六十八歳）

秋刀魚焼くからと子守を任さるる
林檎むく為のテーブルひと拭きす
売店の奥が入口蜜柑狩
蜜柑狩いつかひとりになつてをり
二個三個深夜の卓の蜜柑かな
整理券持たされてゐる年の暮
懸命に登る石段初詣
元旦のつぶつぶつぶす離乳食
生花に少し水足す三日かな
窓際に近き鳥声雪の朝
雪遊びでつかい声で誘はるる
煌煌と仁王の腹の冬日かな
木の瘤の魔女めく春の嵐かな
早春の海辺の町の理容燈
今もある本家の井戸や梅開く
二人連れ犬連れ子連れ梅真白
利根川を越えたる杉の花粉かな
石段をひひなに譲る海の神
鳥帰るモデルハウスの並ぶ町
チューリップ父に似る子と母似の子

●三席「虹の輪」

草子洗（大分県大分市 四十一歳）

あをぞらのスケート靴の雫かな
寒鯽や雲に湧き立つ人のこゑ
コルク抜く音よハッピーニューイヤー
天の道太くありけり初山河
大鷹のひろがりを乗せ由布の空
島へゆく橋をわたれば春動く
東より大地ぬくもり孕鹿
風光るコーヒー豆をひく音色
しらうををすくひひとしき光あり
龍天に登る万物機嫌良し
一反の春一番を呼ぶ帆かな
ちちははの幼く見ゆる蜷の道
少女子の煮つまるまでの騒がしき
鍵盤をつかむよに弾き夏来たる
ひとひらの夕日をすすり冷し酒
いつか私虹の輪くぐり死にゆかむ
痛といふ熱を下げんと今日の月
もてなせば栗めし金にこぼれけり
山の音水にひびくや新豆腐
打診するゆびの優しさ冬に入る

●三席「ふるさとの四季」

北村純一（神奈川県厚木市 七十二歳）

麦踏んで己がリズムに乗りにつけり
初蝶の触るるものみな柔らかし
花吹雪耳の奥まで愉快なり
城壁に忍者のやうな青蜥蜴
麦笛の音色に風も走り出す
川風をたつぷり入れて夏料理
芒原立ち泳ぎして抜けにけり
潮の香の蟹が値札を銜へけり
裸子の鼓動丸ごと抱きにけり
山の端を飲み込んでゆく雲の峰
肩ぐるま日焼けの顔を重ねをり
青簾猫が覗ひて通りけり
身のどこか鍵かけ忘れ昼寝する
鬼やんま尻尾に見せる息遣ひ
鬼灯を上手に鳴らし母になる
蝌蚪あまた八分音符で踊り出す
鈴割りの玉が秋天めつた打ち
徳利の林つくりて月と飲む
悪戯な犬の目にある大花野
居酒屋を出れば氷雨はガラス玉

●佳作入選「ありますえ」

竹村半掃（神奈川県秦野市 七十六歳）

きさらぎやきのふは昨日けふは今日
去りぎわに佛ながめる四温かな
桜もち話し半分耳もたず
たつぷりと水含みけり春豆腐
夏近し豆腐を買ひに嵐山
ででむしの抜け殻にある余白かな
地球より三センチ上胡瓜生
敗戦忌袋でもらふカレーパン
考える葦でありたしところてん
葛餅や男はんのもありますえ
蒸し芋を頬張る朝や外は雨
名残茄子切つてお早うお帰りやす
ご自愛と云はれてもなあ狸々木
ありし日の記憶を剥けり冬林檎
煙管服かぶり風呂吹き大根かな
立ち話しお入りやすな年の暮
シリウスに荒縄を捲く大社
死ぬといふ無限級数松飾る
余生いまサイン・コサイン・シクラメン
スリッパの脱ぎ捨ての向き春隣

●佳作入選「初浅間」

荻原浅風（神奈川県伊勢原市 八十六歳）

どんぐりに怒った顔はなかりけり
相手なき小言は愚痴よ秋の虫
宵闇や訣れた人をふと想う
おおかたは釣瓶落としの生者かな
未枯るるものに色あり匂いあり
ネクタイで古本括り年暮れる
免許証失効させて年新た
初浅間おれに一言云いたそう
双六や鬼女にも遭わず八丁目
寒晴や校舎の時計十三時
安息は炬燵に尻を埋めること
慣れました独居十年二月晴
夭折の女医が置き文巻の道
春愁や呵呵大笑の輪の中に
じいさんと云うその爺の春愁い
冬耕の一畝毎にきのう今日
元気だねと云われただけののどかなる
のほほんど余生逆算日永人
ありがとうを云って死にたい桃の日に
春暁や其処其処生きて借りもなく

●佳作入選「魚の汗」

牟礼鯨（東京都世田谷区 三十二歳）

初蝉や影の短きすべり台
赤色の選挙ポスターてふ暑さ
投票を終へ青芝のカフェテラス
白服に残る皺あり海にほふ
風鈴や大江戸の空深きまで
昼灯す初音小路の片蔭に
鼻高く鬼灯市の売り子かな
四万六千日の雲へ礼
青桐や向島みなまぶしくて
浅草を離れバナナの剥きやすし
炎天をよぎるものなし合羽橋
暑氣払ひベトナムコーヒ苦ければ
細脛に青痣ふたつ半夏生
錆涼しやすりの七本不揃ひに
涼風やふちを湿らす江戸切子
わずかなる決算手当金魚買ふ
雑踏へよろめいて出る夏帽子
鶏肉を串に連ねてゐる西日
ポン菓子のポン鳴る星の手向けとて
瓶をみな底へ沈めて大西瓜

●佳作入選「甚平」

熊澤初江（東京都日野市 八十三歳）

日脚伸ぶ机上の旅へ広ぐ地囃
早春賦きかせて起こす寒造り
子の描く母の似顔絵山笑う
遠蛙調子っぱずれの子守唄
朝東風や茶粥の匂う座禪堂
花だよりテレビで流す美し国
登り廊尼僧の会釈牡丹の芽
生業は煙草屋なりて吊忍
甚平や家族揃って煙草好き
缶ピース二センチで消す水中花
生れし子と煙草の匂いほしいまま
嘘散歩木陰に燻る紫煙かな
醍醐味のかくれ煙草や半夏生
公園は煙草ライターかくし場所
税金屋煙草無しでは身がもたぬ
交渉は紫煙の中に成立す
ミリ数を除々に減らしてフィルタ付
M・R・I肺に積もった白い影
止めた筈煙草の匂いマフラーに
墓前には両切りピース供えけり

●佳作入選「鐵不動」

小巻小乃葉（神奈川県伊勢原市 六十七歳）

思いつきり深呼吸して夏に入る
心太そろそろ癒える恋心
夕暮の良弁滝やところてん
三味線の糸巻き軽し西鶴忌
その角を曲がる近道曼珠沙華
雨降りなる山の紅葉や七不思議
夕闇のヘッドライトに親子鹿
良弁忌洗濯物の生乾き
林道のカーブを右に冬紅葉
月冴ゆる林道走る四駆かな
クリスマス袈裟着た人の笑う門
凜凜と読経のひびく大旦那
酉年の茜色さす鐵不動
そちこちで飴切る音や初大師
肅としてほら貝響く初不動
反発の十二歳とや去年今年
今更に樂しかりけり歌留多取
冬日向ひとりひとりにひとりごと
梅咲いて食べて寝て起き髪梳いて
はるかなる江の島にじみ春ささず

●佳作入選「月あかり」

林 瑞泉（神奈川県厚木市 八十歳）

早春の好きな子と行く元氣かな
店先のビニール傘の春の泥
夕霞携帯を打ち人を待つ
八十路とは春風に乗る心地かな
春の夜の夢に割り込む暴走車
咲き切って薔薇大輪の静かかな
臨席に貰ふ扇子の余り風
血を吸うて蚊が円陣を組み始む
熱狂の柑塙の席に待つ花火
眩きの声の沈みて九月尽
さりげなく問へば身に入む齡かな
名月や言わずもがなの膝栗毛
運不運袋にしまふ月あかり
布袋さん頬を真っ赤に濁り酒
吾亦紅入日の後をさみしがる
くつきりと青空の青冬の朝
雪が降る病みて久しき白内障
ふところに焼き芋のある午後三時
大海の旅に漂ふ木の葉かな
さまざまかわな嫉妬を躲し冬了る